

VITALITE インタビュー

禅仏教とポストモダニズム

花園大学教授・臨済正宗真人会師家

秋月 龍珉

聞き手：佐多保彦 株式会社 東機質 代表取締役社長

佐多：先頃、『世界の禅者—鈴木大拙の生涯—』（岩波同時代ライブラリー）という本をお出しになりましたね。

秋月：ええ。私はこの本を書くにあたって、西谷啓治先生（京大・宗教哲学）から「君は希有（けう）の人の側にいるんだから、何でもいから先生の昔話を聞きだしておいてほしい」と言われました。ところが大拙先生は昔話が嫌いなんですね。君がわしの昔の話を書く暇があったら、唐の古典を日本の若者に親しませるような努力をしろ」と。それでも先生に無理を言って何とか昔の話を聞き出したわけです。

人は年をとるほど昔の話をするものです。しかし大拙先生は96才で亡くなられる最後の日まで、常に前向きの姿勢をとっておられました。その生きざまは、まさに精進波羅密多（しやうじん はらみつた）そのものでした。孜孜として働くという姿勢を貫かれました。法華経の“不即不断の精進心”（ふそくふたんのしやうじんしん）⁽²⁾を持ってという、大乘菩薩の生きざまですね。それは最後まで、まさに“生命力”を生き抜いた方でした。

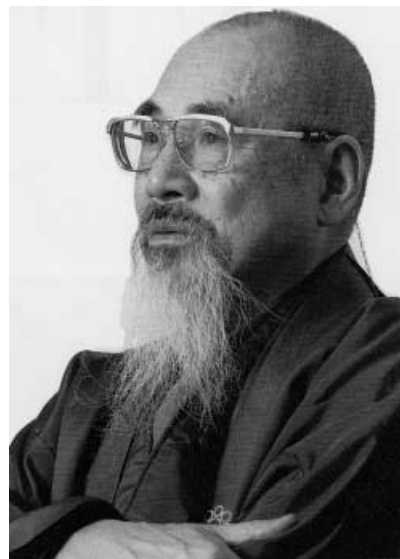
佐多：先生は、禅もいったん滅び始めると速い、今日の禅のあり方を懸念するということをおっしゃっていますが。

秋月：そうです。戦後哲学界の元老であった務台理作先生は、「あなた方の時代には“禅は不立文字だ”」⁽³⁾などと言って何でも秘密にしておかないで、できる限り文字化しておいてください」といわれました。伝統というものは、できあがるのには長い時間がかかります。しかし滅びる時には、一世代、30年で絶えてしまいます。

終戦後来日した、英国のケストラーは「日本には、ダイセツ・スズキが書いているような禅マスターがたくさんいるのかと思って来てみたら、禅臭い坊主ばかりだ」と批判しました。私はそれはある意味では当たっていると思います。しかし、あのころまではまだ、本物の禅僧が何人かおられました。“来たりて見よ”というような、話は判らなくてもその人に会うだけで禅というものを見せて下さる、そんな方がまだいらっしゃったのです。

佐多：すると「一代は一代に如かず」という言葉のように、禅は時代とともに下り坂をたどっているのでしょうか。

秋月：大拙先生は『日本的霊性』（岩波文庫）という本の中で、鎌倉時代に注目せよとおっしゃっています。それ以前の聖徳太子とか最澄、空海はいわば個人芸。日本人が民



あきづき・りょうみん

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒。同大学院修了。現在、花園大学教授、埼玉医科大学名誉教授。月刊誌『大乘禅』主幹、臨済正宗真人会師家。著書に『秋月龍珉著作集全15巻』（三一書房）、『新大乘』（すずき出版）、他多数。



族単位で霊性というものに目覚めたのが鎌倉時代です。日本人の宗教的な主体性が、仏教に触れることによって動き出した。それが鎌倉仏教です。その代表が禅と念仏、そして日蓮（しやうねん）の唱題です。神通としては伊勢神道があげられます。

その鎌倉時代に続いて日本民族の精神が高揚したのが、明治時代です。だから戦後生き残りの、明治生まれの高僧は筋金入りです。どこか違います。幸いなことに私は、そういう方に直接触れることができました。山本玄峰、古川大航、植木憲道、古川堯道、宮田東珉というような老師方です。

率直に言って、高度成長以降に育った人たちはもう日本人だかアメリカ人だか分かりません。ということは、禅だけではなく文化一般に言えることでしょうね。

佐多：そうですか。ところで、先生は葬式にはお出にならな



いそうですね。

秋月：そうです。私はお寺を持っていません。お寺を持つと、檀家の世話、葬式と法事をしなければなりません。しかし本来、お釈迦様の仏教は死者儀礼とはかわりがないんです。今の時代には、一人くらいそんな坊主がいないと仏教のイメージチェンジにならないでしょう。(笑)。

ある檀家の人が壇那寺の和尚さんのところに息子の進学の相談に行きました。すると和尚さんは「わしはナマモノは扱わん」と言ったとか。嘘のような本当の話です。私はこの話を聞いて、じゃあ、私は“ナマモノ”だけにしようと思ったわけです(笑)。

佐多：結婚式には出席なさるんですね。

秋月：ええ。教え子の結婚式にはちゃんと「法衣^{ころも}で出てよいなら」と断って出ています。

佐多：教え子と言えば、先生が埼玉医科大学の教授の頃は、若い医学生たちにどんなことを教えられたのですか。

秋月：埼玉医科大では10年間、倫理学とか宗教学の講義をしたんですが、たった一つのことしか言いませんでした。それは「君たちはこれから西洋医学を学ぶ。これは確かに素晴らしい。しかしその医学の基礎にあるのはデカルト以来の近代的な自我の哲学だ。その根底にある主客・物心二元論をもう一度考え直してみる必要がある」ということです。

ヨーロッパではすでに1840年代に、そういう運動が始まっています。資本主義の発展による近代社会の矛盾が明らかになって、近代はこのまま無限に進歩するどころか、科学や技術の発達で逆に人類を滅ぼしかねない。近代的な自我の思想そのものに“死に至る病”が潜んでいる。ここで詳しく述べるいとまはありませんが、要するに“近代の終末観”ですね。近代的自我を超克した現代的な人間観が興らなくてはならないのです。ポストモダニズムの“後近代者”の自覚です。

戦後の三大思潮は実存主義と共産主義と実用主義です。実存主義と共産主義は心と物の両極端に別れていますが、歴史哲学的な観点から見ると、近代の終末を見てポストモダンを求めた共通の地盤から興っています。

近代的矛盾の自覚が100年以上遅れたアメリカでも、ポ

ストモダンの大きな人類の歴史の流れをみることでできた人がいました。例えば、ここ40年の心身医学です。ストレス性の病気は薬で治してもまたすぐ再発します。体の病気は心の問題と大きく関わっているからです。いや、頭の中では身と心は分けられるけれども、実際は一つなんです。心身医学はそこを見えています。医学自体が精神と物質の心身二元論では立ち行かなくなって来ていることの自覚です。

それからニューエイジサイエンスという物理学の運動がありますね。近代ヨーロッパの科学の行き詰まりを感じ、“東洋の神秘主義”に学ぶ中から、新しい科学を創造しようという動きです。

佐多：西洋と東洋の思想的対話ということでしょうか。

秋月：その通りです。トインビーはキリスト教と仏教の対話から今後1000年の人類を導く深い人間観が発見されると期待しました。

例えば、禅でよく唱えられる“衆生^{しゅじょう}本来仏なり”という言葉がありますね。このことはキリスト教でいう、インマヌエル(Immanuel. 神、我らとともにいます)という言葉の表すものと同じだと思います。仏と神という言葉を一っしょにするわけにはいきませんが、宗教哲学の言葉で、「個」(生きとし生けるもの)と「超個」(神・仏)として考えた時、単なる「個」もなければ単なる「超個」もありません。「個」と「超個」は区別はできるけれども(不可同)、切り離すことはできないのです(不可分)。人間は現実には煩惱妄想^{ぼんのうもうそう}の固まりですし、原罪によって墮落した存在です。それでも本来は仏であり、インマヌエルなのです。このように、概念の違いを押さえながらそこに共通する地盤を見いだして行こうとしているわけです。これも、私の言うポストモダニストの探究です。

-
- (1) 波羅蜜多:般若(最高の知慧)の自発自展による完成
 - (2) 不即不斷の精進心:ひたすら仏道修行に励む姿勢
 - (3) 不立文字:悟りは文字で伝えることができない。心と心で伝えるもの
 - (4) 衆生本来仏なり:生きている人や動物、迷っている人の本性は仏陀(覚者)である